【資料】

進学意欲を高める高大接続事業

――島根大学の経験から――

美濃地裕子，和久田千帆，為石勝美，福間栄子(島根大学)

島根大学入学センターは，大学進学希望者が高校教育から大学教育へ円滑な移行ができるように，高校・大学が連携して行う高大接続事業を実施している。その中でも，実施から 8 年目となる「授業『大学』」と実施から 6 年目の「島大キャンパス・アカデミー」について，これまでの成果と改善すべき課題を明らかにするとともに，今後の高大接続事業の展開について考察した。

1 大学を身近に感じる仕掛け

1.1 大学生をイメージしにくい高校生

島根県内の大学数は 2 校であり，日ごろから大学生の姿を目にしたり，大学生と話をしたりする機会を持ちにくい地域に居住する高校生は多い。県内の高校生は大学や大学生についての情報を映像から得ることはあっても，生の情報を得る機会は多くない。大学のオープンキャンパスや，高校単位で実施する大学訪問を除けば，大学を訪れる機会はあまりない。

そのため，上記の高校生にとって，大学生から直接話を聞いたり，大学生と一緒に活動したりすることは，きわめて貴重な体験となる。そこで，本学入学センターは，高校生に大学の魅力を伝え，高校生のロールモデルとなる大学生とともに高校の授業の中や，大学でのスクーリング等で活動する場を提供することにより，高校生が大学を身近に感じ，さらに，進学意欲を高めることを目指す高大接続事業を展開している。

本稿では，まず，二つの高大接続事業の活動概要とその位置づけを紹介する。

1.2 授業「大学」と島大キャンパス・アカデミー

1.2.1 授業「大学」の活動概要

授業「大学」は，高校単位で行う高大接続事業で，本学学生が直接高校生と関わりながら「大学」をテーマにしたグループワーク中心の授業を行うものである。高校生が大学に憧れを持ち，積極的な進学意識を形成することを目的としている。

これは，大学生（数人から多い時は 40 人程度）が高校に出かけて行き，「総合的な学習の時間」等の授業時間などにインストラクターとして高校生と活動するものであり，平成 20 年度から平成 27 年度までの 8 年度間に，島根県内の高校，延べ 17 校，2,373 人を対象に実施した。

内容は，高校生が大学生のサポートを得て大学についての理解を深めるワークにより「大学」のイメージを具体化したり，なりたい理想の自分の姿を想像し，そのようになるための目標を立ててグループ内で共有するというようなことなどである。内容は，当該高校の担当教員のニーズを入学センター教員が聞き取り，打ち合わせをもとに企画するため，年度や該当する高校によって少しずつ異なる。授業「大学」の詳細な内容や方法については，高校側の希望を踏まえて，インストラクターとして高校生に関わる大学生の企画メンバー（コアメンバー）数人が案を出し，時間をかけて練り上げる。入学センター教員は企画・準備段階の大学生を指導する。授業「大学」の詳細な内容が出来上がると，大学生の企画メンバーは，当日インストラクターとなる他の大学生メンバーに事前に伝達講習する。

授業「大学」の実施校は，島根県内の高校を対象にしている。近年は，1 学年 5 クラスで実施する高校においては，大学生インストラクター40 人程度が参加している。大学生インストラクターは，一人で 5 人～6 人の高校生を担当することが多い。

授業「大学」は，日ごろ，大学生と出会うことが少ない地域に立地する高校で，高校生が大学生と身近に接し，大学生の姿を通して大学を知る機会となっている。高校生に対して知的な側面というよりも情意的な側面からアプローチし，大学や大学生の魅力を感じてもらい、大学進学という進路の選択肢を意識してもらおうというものである。

1.2.2 島大キャンパス・アカデミーの活動概要

島大キャンパス・アカデミーは，高校生が自ら設定した課題について探究する個人単位で行う高大接続事業である。探究の過程では，大学教員や大学生からの助言を得る。論文を作成することを通して，高校生が地域社会・文化・自然とのかかわりの中で見つけた知的な興味・関心を学習課題として設定し，課題を解決する方策を見い出そうとする力を培うことを目的にしている。高校生は，参加した他の高校生や大学生と

意見を交換しながら考えを広げていく。また，自分が興味を持った課題について大学教員のサポートを得ながら掘り下げていく。これらのことを通じて，高校生が高校の授業では経験できない大学での学びに触れて，大学に対して知的な側面から魅力を感じることを目指している。

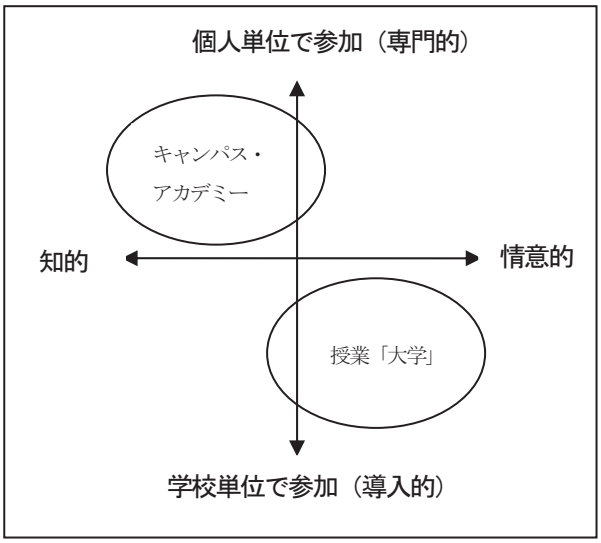

図１ 授業「大学」と島大キャンパス・アカデミー

図１のマトリックスで示すように，学校（学年・学級）単位で参加する授業「大学」の内容は，より低学年向き（導入的）な要素が強く，島大キャンパス・アカデミーは，やや高学年向き（より専門的）な要素が強い。

参加する高校によって考え方が異なるものの，授業「大学」は高校１年生の担任からの申し込みが多く，島大キャンパス・アカデミーは，高校２年生からの申し込みが多い。高校生の発達段階や高校におけるキャリア教育（または進路学習）の年間計画等カリキュラムにおける教育活動の位置づけにより，各高校で，本学の高大接続事業に参加させたい学年を判断しているようである。

なお，平成 27 年度島大キャンパス・アカデミーの主なスケジュールは次のとおりである。

・第１回スクーリング　11 月 15 日（日）
・第１回中間レポート提出締切　11 月 27 日（金）
・第２回スクーリング　12 月 12 日（土）
・第２回中間レポート提出締切　12 月 18 日（金）
・中間発表会　12 月 26 日（土）
・研究室訪問　適宜
・最終発表会　平成 28 年 3 月 6 日（日）
・課題探究論文提出　平成 28 年 3 月 31 日（木）

上記のとおり，島大キャンパス・アカデミーに参加する高校生は，大学で行うスクーリングで，課題設定の方法や仮説の設定について学び，各自で中間レポートに取り組むことにより論文作成に取り組んでいく。そして，自分で設定した探究課題について，大学で実施する中間発表会と最終発表会の場で報告する。中間発表会と最終発表会の間には，研究室訪問により，大学教員から専門分野に関連するアドバイスを受けたり，入学センター教員と大学生による高校訪問での指導を受けたりすることができる。

授業「大学」が一回性の事業であるのに対し，島大キャンパス・アカデミーは大学で複数回にわたる受講があるため，高校生には自ら設定した課題を数か月かけて探究していく主体性と持続力が求められる。島大キャンパス・アカデミーは，平成 22 年度から平成 27 年度までの 6 年度間に，島根県と鳥取県の高校延べ 20 校，142 人の高校生を対象に実施した。なお，平成 27 年度に 14 名の高校生が設定した探究論文のテーマは次のとおりである。

表１　島大キャンパス・アカデミー　探究テーマ

1.　ジャン・ポール・サルトルの思想への理解
2.　教育現場で３D ホログラムを用いることは可能かどうか
3.　仮想現実を用いた医療
4.　紛争地帯に住む難民の子供たちへの日本からの有効な支援の方法
5.　小野篁の伝説と人物像との関係性
6.　なぜ日本人は英語を話そうとしないのか
7.　江津の駅前活性化は必要か
8.　LGBT の方がより快適に生活できる社会にしていく為にはどのようなことが必要か
9.　入院しているがん患者の心理状態
10.　海洋汚染の問題と改善策
11.　日本の高校英語教育の問題点と改善点及びその必要性
12.　日本教育の再考
13.　地球温暖化は人為的要因によるものなのか，環境的要因によるものか
14.　山陰合区案決定の問題点

2 活動の成果

2.1 授業「大学」

授業「大学」の成果については，高校側への聞き取りと参加した高校生からのアンケート等から検証した。

平成 20 年度（授業「大学」実施初年度）実施後の高校への聞き取りでは，参加高校 2 校のうちの 1 校から，「進学に向けての意識をさらに喚起するには（略）生徒が自分から関わる学習活動が有効である。20 人～30 人程度の国公立大学進学希望者増加がみられた。」とある(田中,2009,:2）。

また，授業「大学」の実施初年度から継続して参加しているA高校の本学への志願者数は，8 年間で生徒数が減少しているにもかかわらず，ほぼ一定を保っている。この結果は，高大接続事業のみに起因するものと断定することはできないが，本学への進学志向性が割合としては高まっているとみることができる。しかし，別の見方をすれば，本学は A 高校にとって地元で唯一の国立大学であり，進学したい大学として一定数の高校生が志願しているとみることもできることから，より詳細な検証を進めることが必要である。

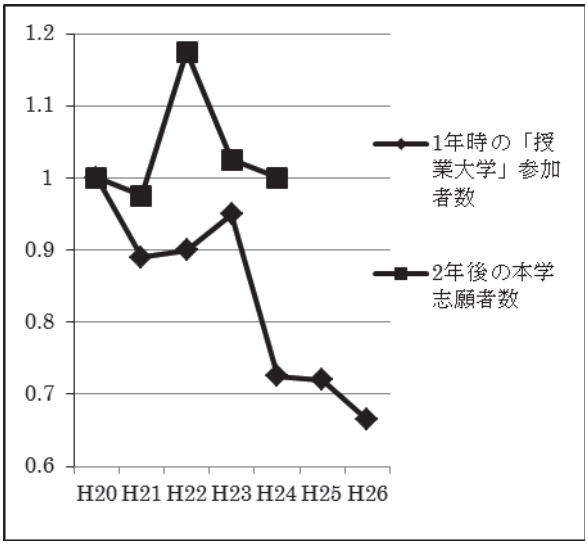

図 2 授業「大学」に参加したA高校の年度別参加者数と本学志願者数

さらに，今年度実施した授業「大学」の事後アンケートによると，同高校で参加した 1 年生 136 人のうち 2 人を除く全員が「大学・大学生のイメージがプラスになった」と回答している。プラスになったと回答した高校生の感想としては，

- 大学生インストラクターの一人一人がしっかり話をしてくれて，自由時間の使い方や日々の勉強方法などがわかりやすく，充実していることがわかり，自分もやってみたいと思った。
- （大学生の話を聞いて）高校生である今はすごく大切な時期であると思った。2 年生になれば文理選択もあるし，これから将来について考えることが必要だけど「準備」をしっかりしていきたいと思った。
- 現役大学生の先輩方と一緒に授業ができて，とてもよかった。

また，イメージがマイナスになったと回答した高校生の感想としては，次のようなものがあった。

- 大学での授業は先生に言われたこと以上に勉強しなければならないと知って，高校とは全然違って大変そうだな，と素直に感じた。自分が想像していた大学生活とは違ったところを知ることができて貴重な体験だった。

以上のことから，授業「大学」は、高校生に大学（大学生）を身近に感じてもらい，大学についてのイメージを広げたり、深めたりしてもらうという目的を果たしていると考える。しかし，授業「大学」への参加前の高校生が大学に対して持っていたイメージがどのようなもので，それがどのように変容したのかについて，より緻密に検証できるような設問を立てることが必要である。

さらに，インストラクターを務めた大学生も企画力や協働性を高めることができたという実感を持っている。大学生からの事後の感想としては，次のようなものがある。

- インストラクターとして事前研修や高校生に提供する話の準備など，授業の目的を踏まえて真剣に準備した。そのことにより（学生インストラクターは）例年より高い意識や向上心をもって当日の授業に臨むことができた。
- 高校の担当の先生に事前に高校生に考えてきてほしいことを準備していただくようにお伝えしていたため、高校生の取り組みが予想以上に積極的だった。

2.2 島大キャンパス・アカデミー

平成 27 年度の島大キャンパス・アカデミーに参加した高校生，高校教員，大学教員および大学生へのアンケート，即ち、①高校生の参加動機，②島大キャン

パス・アカデミーの良かった点，③活動を通してどのように成長したのかという結果から，この事業の成果を検討した。

2.2.1 参加した高校生の意識

今年度は山陰両県から 5 校，14 人の高校生が参加した。島大キャンパス・アカデミーに参加した動機（複数回答可）は，「高校の先生に勧められたから」（10）が最も多いが，「自分で課題を見つけてそのことについて考えたり，探究したりすることが好きだから」（4），「島大キャンパス・アカデミーで探究論文を作成することに興味をもったから」が（4），「高校で行う『総合的な学習の時間』『課題研究』での発表に役に立ちそうだったから」（2）であり，教員からの勧めはきっかけになっているものの，自発的に探究心を持ってエントリーしたことがうかがえる。

「探究課題の設定や，仮説を設定する段階では，参加した他の高校生や大学生スタッフ，高校・大学の先生のアドバイスは参考になったか」という設問には，全員が「ほぼあてはまる」と回答している。さらに，「大学生や大学教員からのアドバイスが勉強になった，ありがたかった」という感想が自由記述欄にも複数見られることから，大学生にマンツーマンでアドバイスをもらえたことや，研究室訪問でアドバイスをもらえたことが良かったと感じていることがわかる。

また，高校生の感想として，次のようなものがあった。

・自分で課題を決めてそれについて調べていく経験をしたことがなかったので，貴重な経験になった。
・自分から学びに行くということはしてこなかったので，とてもよい機会になった。この経験を糧に今後も探究していきたい。
・自分の疑問に思ったことを突き詰めていく楽しさと難しさを知った。今後も疑問に思ったことを積極的に突き詰めていきたい。

島大キャンパス・アカデミーで，アクティブに学ぶ経験や協働で学ぶ体験をした高校生は，探究するプロセスの楽しさと難しさを感じ取っている。大学の学びに触れる経験から，高校生の探究意欲が高まったり，はじめは意見交換できなかったが自分の考えを少しずつ表現できるようになったりといった成長がみられた。

2.2.2 参加した高校教員の意識

5 校の高校教員 7 人から回答をいただいた。

参加動機（複数回答可）については，

① 島大キャンパス・アカデミーに興味を持ちそうな生徒に勧めたところ，参加を希望した(4)
② 高校の時に，島大キャンパス・アカデミーのような活動に参加することは，課題探究能力等の力をつけることになり，大事なことだと考えて生徒に勧めたところ，希望があったから(4)
③ 島根大学に進学を希望する生徒を担任しているので，その生徒に勧めたところ，参加を希望した（1）
④ 高校で行う「総合的な学習の時間」や，「課題研究」での発表に役に立ちそうだったから（1）
⑤ 校内の学年会で参加することになり，参加しそうな生徒を推薦して，生徒に勧めたところ，希望した（1）

という結果であり，課題探究力を育成することを大事なことだと考えて，興味を持ちそうな生徒に勧めているが，本学への進学を希望する高校生に参加を進めた高校教員は少ないことがわかる。

島大キャンパス・アカデミーに参加したメリット（複数回答可）については，次のとおりである。

① 参加した生徒は，大学の学びの魅力に触れることができた(6)
② 参加した生徒は，自ら課題を探究することの面白さや難しさを知ることができた(5)
③ 参加した生徒は，課題探究力等の力をつけることができた(5)
④ 参加した生徒は，進学意欲を高めることができた（できそうである）(5)
⑤ 参加した生徒は，普段の学習への意欲が高まってきた（今後，高まりそうである）（3）
⑥ 参加した教員にとって，大学教員や大学の研究室とのつながりをもつことができた（2）
⑦ 参加した教員にとって，大学の学びや研究の中身に触れる（知る）ことができた（2）
⑧ その他；学生との質疑応答は生徒たちの思考を練ることができて良かった。（1）

島大キャンパス・アカデミーに参加したことで，高校生にどのような力がついたと感じるか（複数回答可）については，次のとおりである。

① 課題を探究・追究しようとする意欲（6）

② 質問したり，人と意見交換しようとしたりする積極性（5）
③ 情報収集力（調べ方・調べる方法について少し詳しくなったなど）（3）
④ 困難でもやり遂げようとする粘り強さ（2）
⑤ 学校の学習や部活動などと両立しようとする時間の使い方などの自己管理能力・調整力（1）
⑥ 様々な事象から，自分で課題を見つけ出す力（1）

また，「研究室訪問を通して生徒のモチベーションが高まる機会となった。」，「（教員自身）研究室訪問から本気になった。双方向の学びの大切さを改めて感じた。」，「早期から知的探究に触れることができる良い取り組みである。」等のご意見をいただいた。このように，高校教員のアンケート結果からも，高校生の回答と同様に，島大キャンパス・アカデミーにより，高校生の課題を探究しようとする意欲や人と意見交換するなどの積極性は高まったという感想を得た。

2.2.3 参加した大学生の意識

高校生が課題や仮説を設定し，探究方法を考える過程で，高校生に寄り添い，相談に乗ったりアドバイスをしたりする大学生スタッフの意識をアンケートから検討した。

大学生スタッフは，自らの意志で島大キャンパス・アカデミーのサポート役として参加した 1 年生から 3 年生までの十数人である。学部の専門性が生かせる課題もあれば，学生スタッフの得意分野ではない課題もあるが，一対一で高校生を担当することを課した。

「島大キャンパス・アカデミーに参加して自分が成長できたと思えることがあれば書いてください」という質問に対して，回答数 12 人の結果は次のとおりである。

「聞く力がついた」(3)
「関心の幅が広がった」(3)
「相手にどのように関わるかなど，まだまだ力が足りないことがわかった」(4)

大学生スタッフのうちの一人は，大学で専攻する分野について発表した高校生に対しアドバイスをすることができたので，自分自身の大学での学びに自信を持つことができた，という感想を記していた。

本学の高大接続事業の特色は，大学生が活動に関わることにより，大学生の姿を通して高校生が刺激を受けるだけでなく，大学生自身も高校生に関わることを通して，気づいたり，学んだりする点にある。聞き役に回ることで，的確な質問を投げかけることの難しさに気づいたり，大学での学修で身に付けた知識や考え方を用いてアドバイスができたことで自己有用感を得たりしている。

2.2.4 参加した大学教員の意識

入学センターの教員が，島大キャンパス・アカデミー全体の進行管理と，高校と大学との調整を担当する一方で，学部教員には研究室訪問の受け入れを依頼した。前掲の高校生が設定した 14 テーマについて本学の 5 学部の教員に研究室訪問の受け入れを依頼し，高校生からの探究課題についての質問に対応していただいた。高校生の研究室訪問を受け入れた学部教員の感想は次のとおりである。

・参加した高校生には，これをきっかけとして，引き続いて探究を進めてもらえたらと思う。失敗を恐れることなくチャレンジを続けてほしい。
・高校生と直接話をさせてもらえたのはうれしいことだった。研究室の学生にも手伝ってもらったが，彼らにもよい教育機会になった。
・高校生の発表は，本来の学業と並行しての研究としては立派なものではないでしょうか。
・おもしろい取り組みだが，関わる方としてはどこにゴールを設定してあげたらよいのか迷った。

熱心に探究活動に取り組む高校生に対し，学部教員からも惜しみないアドバイスやサポートをいただいた。入学センターからは，学部教員に対して，主として研究室訪問での関わりを依頼したため，どこまでのサポートをすべきか迷いをもたれた方もあった。

3 今後の課題

3.1 参加者数の変遷から

3.1.1 島大キャンパス・アカデミーの参加者数

表 2 は，島大キャンパス・アカデミーの過去 6 年間の参加高校数と参加者数である。平成 22～23 年度は，グループでの受け入れを可としていたため，参加者数は多いものの，高校生への丁寧なサポートができにくかった。

平成 24 年度からは個人による探究活動に限定することとし，丁寧なサポートは行いやすくなったが，その後エントリー数が伸びないことが課題となった。参加者数が伸びない理由として，次の 4 点を挙げる。

① 高校生が多忙であること。
⇒学業と部活動等でスケジュールが埋まり，課

題探究活動等に向かう時間を生み出しにくい。高校教員も多忙で引率が困難。

② 地理的に遠いこと。
⇒山陰両県が東西に遠距離であることに加えて，公共交通機関が十分でないこと。

③ 広報が十分でないこと。
⇒探究活動の長所を十分ＰＲできていないこと。

④ 高校にとって魅力的な設定になっていないこと。

今年度は山陰両県から 14 人の高校生の参加があり，多忙な高校生の中にも，探究活動に取り組みたいという強い意欲をもつ高校生がいることがわかった。しかしながら，地理的な遠さから，参加した高校生は実際に移動に困難を感じていた。島大キャンパス・アカデミーは，スクーリングや研究室訪問等で高校生が大学を訪れる必要があることから，島根大学に通える範囲に居住する高校生を対象にしている。島根・鳥取両県の高校 78 校のうち，本学に何とか通うことが可能と思われる距離にある高校 52 校に案内文を送付している。しかし，多くの高校が土曜日の午前中に補習授業を行っており，本学で午後 2 時から開始するスクーリングに参加できる高校が限られることから，高校に対して積極的な広報を行っていない面がある。

今後の課題は，①～③についてよりも，本質的には④に対応することにあると考える。今の高校の実情に合った内容と時間設定等を再検討することである。

表 2 島大キャンパス・アカデミー参加高校数と参加者数

	参加高校数	参加者数
平成 22 年度	4	19 件(44 人)
平成 23 年度	7	30 件(66 人)
平成 24 年度	1	9
平成 25 年度	2	4
平成 26 年度	1	5
平成 27 年度	5	14

3.1.2 授業「大学」の参加校数

表 3 は，授業「大学」の過去 8 年度間の参加校数・参加者数である。こちらの事業についても，平成 24 年度から 1 校のみで実施する状態が続いたため，平成 27 年度は島根県の全高校（46 校）に公募を行ったところ，4 校から申込みがあった。日程調整の結果，平成 27 年度は 3 校での実施となったが，高校におけるキャリア教育や進路学習等の定着に起因するものか，この事業についても，高校からのニーズがあることがわかった。大学生の力を借りて実施する事業であることから，参加高校数をこれ以上増やすことは困難であるが，今後も県内全校への公募は継続していきたい。

表 3 授業「大学」参加高校数・参加者数の推移

	参加高校数	参加者数
平成 20 年度	2	330
平成 21 年度	3	426
平成 22 年度	3	435
平成 23 年度	3	431
平成 24 年度	1	145
平成 25 年度	1	144
平成 26 年度	1	143
平成 27 年度	3	326

3.2 新たな高大接続事業の開発

これまでの高大接続事業の成果を生かしながら，新たな事業を開発し，進めること。併せて，これまでの事業との整理統合についても検討する必要がある。

例えば，島大キャンパス・アカデミーの探究課題のテーマとして近年出てくる「地域活性化」「地域創生」に関わるテーマを特化して取り上げて進めることはできないか。地域課題学習に取り組む高校が増えている中で，高校のニーズに沿ったアクティブな学びの仕掛けを提供するとともに，高校の状況に即した開催場所や実施回数等について計画していきたい。

参考文献

.

田中　均 (2009). 「第1章　実践研究　授業『大学』」『高大接続研究　第2集』島根大学入試センター, 2-13.

田中　均 (2008). 「第2章　実践研究　授業『大学』」『高大接続研究　第1集』島根大学入試センター, 16-24.

田中　均 (2010). 「第2章　実践研究　授業『大学』島大キャンパス・アカデミー」『高大接続研究　第3集』島根大学入試センター, 10-40

田中　均 (2011). 「第2部　高大接続シンポジウム講演「島根大学の高大接続―高大接続の地平をひらく―」」『高大接続研究　第4集』島根大学入試センター, 42-49..